

皆様こんにちは。今日はお客様として京都大学医学部 大塚様、西宮恵美寿RC会長 松本 様、米山奨学生 金君、ようこそお越しいただきました。ごゆっくりとお過ごしください。

2月16日(土)少年野球肘検診報告会では寺尾委員長はじめ社会奉仕委員会の皆様ご苦労様でした。お手伝い頂きました会員の皆様ありがとうございました。今日は高校球児の『球数制限導入』のお話をします。

新潟県高野連が今年4月末に開幕する春季大会で投手の球数制限を導入することが分かりました。投手の障害防止や、選手の出場機会を増やすことなどが目的で、球数が100球に達した投手は、それ以降の回に登板することができません。全国に先駆け、公式戦では初めての取り組みとなります。



日本国内でも年々、高校球児の過酷な環境を問題視する声は高まっています。日本高野連は、今年の夏の甲子園大会で、休養日を現行の1日から2日に増やすことを検討しています。球児の負担軽減などが目的です。

日本高野連の竹中雅彦事務局長は、「阪神電鉄や甲子園球場に要請しています。熱中症対策をしてきたが、それを一歩進めた形」と明かしました。

休養日は2013年の夏の甲子園大会から導入され、準々決勝翌日に設定されています。同じく負担軽減のため、春の選抜大会からは延長13回から無死一・二塁の状態での攻撃を始めるタイブレークを採用しました。

それでも昨夏準優勝した金足農の吉田輝星投手は、1回戦から決勝までの6試合で計881球を投げ、5日間で4試合目となった大阪桐蔭との決勝では疲労困ぱいで、投球過多が問題視されました。

では、日本の高校野球はどれほど優れているのでしょうか？仮に米カリフォルニア州の高校チャンピオンが甲子園で戦ったらどうなるのでしょうか？アメリカがエースに3連投や4連投させることは決してないから不利だという人がいるかもしれません。



日本では早稲田実業高校の斉藤佑樹(現日本ハム)投手が2006年、夏の甲子園の2週間で948球を投げました。彼はチームで最高のアスリート。彼の連投がなければ早稲田実業高校の優勝はなかったでしょう。

これをアメリカの人々は「子供に対する虐待」という。米国の高校では1週間に120球という球数制限を設けている。

それにより、アメリカの高校には常に2人から3人の先発投手が必要になるのです。

全国の熱心な指導者が、野球の裾野を支えているのは間違いありません。

全日本軟式野球連盟の宗像専務理事は『追跡調査では多くの選手が肩や肘に違和感があるという医学的なデータもあり、待ったなしの状況だ。指導者にはチーム編成や指導方法を見直してほしい』と話しています。

選手も肩を壊さず大学で活躍したりプロに行けたりすれば違う世界があり、違う景色を見られる。時代に合ったスポーツ文化を作るために負の連鎖は断ち切るべきです。

